Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.94

平成27年度豊田市郷土資料館特別展

家康の遺宝展

～松平から徳川へ～

東照大権現像（徳川記念財団蔵）

木造松平親氏坐像（個人蔵）

大工道具及び箱（日光東照宮宝物館蔵）

目次

特別展「家康の遺宝展～松平から徳川へ～」2・3
民具調査だより 20　火熨斗と炭火アイロン 4・5
仏像のススメ 6・7
豊田市に残る　松平家の山城 8
夢あふれた枝下吊り橋跡 9
新収蔵資料紹介 3／とよた歴史マイスター／全国地芝居サミット 10

ISSN 0919 - 0120
201601 No.94

平成27年度豊田市郷土資料館特別展／徳川家康公400年祭記念事業

家康の遺宝展 ～松平から徳川へ～

国宝・重要文化財 来る!

徳川家康公４００年祭

徳川家康は元和２年（1616）４月17日、75歳の生涯をとじました。それから400年、家康公の遺徳を偲び業績を顕彰する事業が多く実施されています。これにあわせ豊田市郷土資料館では特別展を開催します。今回はこの特別展の見所を紹介します。

徳川家康祖先ゆかりの地・松平郷

「木造松平親氏坐像」（個人蔵）

徳川家康からさかのぼること８代前・松平親氏（ちかうじ）は徳阿弥と名乗り、時宗の僧として諸国を行脚（あんぎゃ）し、松平郷へやってきたと伝えられています。松平郷で松平太郎左衛門家の婿（むこ）となり家を継ぎました。親氏は、道を広げ橋をかけ、領内を整備しました。松平城（郷敷城）を築き、次第に周辺の有力な氏族を従え支配地域を拡大していきました。

＜見所！＞現在の豊田市松平郷には松平氏館跡、松平城跡、親氏が天下泰平を祈願したと伝わる天下峯、松平家の菩提所・高月院など多くの史跡を訪れることができます。展覧会では、松平氏ゆかりの史跡を紹介するとともに松平太郎左衛門家に伝わった家康拝領の甲冑・軍配などをご覧いただけます。

家康とともに戦ったゆかりの武将

家康が若い頃からともに戦った市域ゆかりの武将に、榊原康政、渡辺守綱、内藤正成、内藤家長がいます。榊原康政は、三河国上野（上郷町）で生まれ、祖父・清長の代から家康の父・広忠に仕えていました。松平家の混乱の中、上野城主酒井忠尚に属していましたが、康政が13歳の時、学問をおさめていた岡崎の大樹寺で家康と出会い、家康がその才能にほれ込み、自らの侍童としたといわれています。

「徳川十六将図」榊原康政（個人蔵）

榊原康政は家康隊の先鋒として活躍したことに加え、家康のそばにいて様々な取次をする奏者（そうしゃ）という役割を担っていました。小牧長久手の戦いの際、豊臣秀吉を非難した「檄文（げきぶん）」でも知られています。

関ヶ原の戦いでは、徳川秀忠軍が決戦に間に合わなかった時、激怒した家康に対し、遅れた責任を一身に背負い寛大な措置を願い出たり、論功行賞で、家康が水戸25万石を与えようとしたのに対し、当時の領地より江戸から遠くなり、緊急時にいち早く駆けつけられなくなると固辞したといったエピソードが残り、家康の信頼が厚かったことで知られています。

「徳川十六将図」渡辺守綱（個人蔵）

渡辺半蔵守綱は、家康と同じ年の生まれで、弘治３年（1557）から家康に仕え槍の名手として多くの合戦で武功をあげ、「槍の半蔵」といわれた武将です。慶長５年（1600）には家康から褒美として「南蛮胴具足（なんばんどうぐそく）」を与えられ、足軽50人を加えられ足軽百人組を従えました。

守綱の肖像画は、この南蛮胴具足を着用した姿で描かれています。守綱は、家康から知行を与えられていましたが、慶長18年（1613）に新たに5千石を加増され尾張藩徳川義直に属することになりました。この時、義直からも尾張国内で5千石の領地を与えられたため、あわせて1万4千石となり寺部に陣屋を置きま

した。以後明治維新まで渡辺家は寺部地域の領主でした。

江戸時代の豊田市中心市街地を治めた挙母藩内藤家の祖先である内藤家長、徳川十六将に数えられる内藤正成もゆかりの武将です。二人の武将は従兄弟同士、上野城（上郷町会下）にあって、正成は叔父である家長の父とともに戦いました。正成は家康の父の代から仕えた武将。二人はともに弓の名手として知られています。家長は、関ヶ原の戦いで息子の小一郎とともに戦死しました。また、正成が病気になった時、秀忠がその治療を医師に命じたといわれる程でした。

（伊藤智子）

「内藤家長像」（豊田市郷土資料館蔵）

＜見所！＞渡辺守綱像と着用している南蛮胴具足を一緒にご覧いただけます。渡辺家ゆかりの「長篠・長久手合戦図屏風」は豊田市指定文化財です。市内で、揃（そろ）って展示されるのは、10年ぶりのことです。

家康の遺宝：見所！

今回の展覧会では、「家康の遺品」「家康から拝領した品」「家康をまつる日光東照宮に伝わった文化財・作品」を特別に展示します。

国宝の「大工道具及び箱」は日光東照宮造営時の儀式に使われたもの。美しい装飾は必見です。重要文化財の太刀は、刀身の姿、刃紋をご覧ください。葵紋（あおいもん）を散らした蒔絵（まきえ）の拵（こしらえ）も立派なものです。「東照社縁起」は家康公の一生を絵巻にしたもので、巻１は、御誕生の場面、小牧の陣の場面などがあります。

最後に「洋時計」レプリカを紹介します。家康が大切にしていたスペイン国王から贈られた洋時計。精巧に再現されたレプリカを展示します。

●国宝　「大工道具及び箱」（日光東照宮宝物館蔵）
＊展示期間　前期

●重要文化財　「太刀　銘一　附　糸巻太刀拵」
（日光東照宮宝物館蔵）

●重要文化財　「東照社縁起（仮名）」巻１（日光東照宮宝物館蔵）

洋時計（レプリカ）
（久能山東照宮博物館蔵）
※展示期間　後期

■会　場　豊田市美術館　展示室５
■会　期　前期　平成 28 年２月６日（土）～２月 28 日（日）＊国宝展示
　　後期　平成 28 年３月１日（火）～３月 21 日（祝・月）＊洋時計（レプリカ）展示
■観覧料　一般 500 円　高校・大学生 400 円
　　豊田市在住 75 歳以上／豊田市在住・在学の高校生及び中学生以下は無料

炭を使う道具

火熨斗（ひのし）と炭火アイロン

炭と灰

豊田市郷土資料館では、小学３年生を対象とした社会科学習で実施している「古い道具と昔のくらし」の中で、衣・食・住に関する古い道具の解説を行い、先人達の暮らしぶりや工夫された道具を実際に見てもらい、昔の人たちがどんな道具を使い、どのような暮らし方をしていたかを考えてもらっています。そのような場で“火鉢”の説明を『火鉢は暖をとるだけでなく、五徳（ごとく）を置いて鉄瓶で湯を沸かしたり、燗（かん）を付けたり、網をのせて餅を焼いたりでき、さらに火鉢をかこんで話し合う団らんの場はとても大切な時間でした』などと説明をするわけですが、驚くことに小学３年生のほとんどが、火鉢で使う炭と灰のことを知らないという現実があり、昔のくらしに対する理解が深まりません。炭は「炭は黒っぽいきたないかたまり」で、灰はというと「ネズミ色の細かい砂のような粉」などと、これらを言いあらわします。これでは灰の中に置いた炭が長い時間燃え続けられることも伝えられません……。このことは、くらしの中におけるエネルギー源が戦後になってめまぐるしく変化をしてきましたので、無理のないことかもしれません。戸外で行うバーベキューでは、電気やガスが無くても炭を使えば焼いたり湯を沸かすことができますし、今のくらしの中でも、たとえ石油や電気、ガスが途絶えても炭を備えておけば、しばらくの間は食事と暖房には困らないでしょう。

衣・食・住の場面で、日々の食事も住における暖房も炭が担ってきました。衣に関わる炭の役割はと言いますと伸（の）すための道具です。それらには、炭の熱を間接的に利用するものと、熾（お）き火を容器に入れ熱を直接利用するものとがあります。

火で熨（の）す火熨斗（ひのし）

熨すは伸すと同源で、シワを伸ばし、平らにすること、力を加えて伸ばし広げることを言い、中国では熱した金属の熱と重みにより、布を伸ばす行為を「熨」と言い、それに用いる道具を「火熨」又は「熨斗」と言ったそうです。斗はヒシャクでその形状を表している漢字です。火熨斗は小型の水柄杓（みずびしゃく）のような形をしており、平安時代に中国から日本に伝わり、江戸時代に広く普及しました。底の部分を布に押し当て、柄（え）を持って押し伸ばすようにして使います。炭を入れる量で火力の調節ができましたので使い勝手は良かったようで、炭火アイロンが登場しても和服を伸ばすのには焼（や）き鏝（ごて）とともに長い間使い続けられ、電気アイロンが一般家庭に普及する昭和30年（1955）頃まで使われました。火熨斗をかける様子が、馬棟（ばれん）を使って摺（す）りあげる木版画の制作工程に似ていることからでしょうか、火熨斗をかけそこない焦げを作って布をダメにすることを「火熨斗摺（ひのしず）り」などと言ったようです。

Wφ120 H60 D400（単位㎜）
受け台 W135 H62 D440
受け台の金属は、コンロ用の鉄製のサナを利用しています。

Wφ128 H160 D440

Wφ118 H90 D344

ヒシャクモアリマス

画家の安野光雅さんの著書『少年時代』に、消えていきそうなものとしてあげられていたものがあります。

［ひのし］－『わたしが小学生のころの国語教科書の一年生の本に「モノサシガアリマス、ハサミガアリマス、ヒノシガアリマス」という項目があり、それぞれ絵が載っていた。字が完全に読めない子は、その絵を見て、「モノサシガアリマス、ハサミガアリマス、ヒシャクガアリマス」と読んだ。ヒノシというのは柄杓のような形はしているが、アイロンのことで、柄杓のようなものの中に炭火を入れて熱し、布の皺（しわ）をのばす。いまでは電気アイロンになり、さらに蒸気が出てくるものまでできている』

水柄杓

尋常小學 國語讀本

炭火アイロン

炭火アイロンは、「西洋火熨斗（せいようひのし）」「舟形火熨斗（ふながたひのし）」などとも呼ばれ、幕末から明治の初めの頃に衣服の洋装化に伴って日本に伝わったと言われています。火熨斗と同じように、容器の中に炭を入れて使います。

W99　H150　D179　重さ 1.2 kg

握り手：アイロン全体が熱をもつので握り手は熱の伝わりにくい木製。

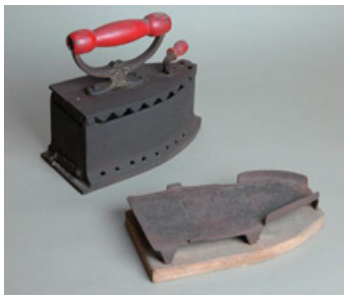
煙　突：ガス抜きのための煙突と言われていますが、イギリスでは石炭を熱源にしていたので煙出しのための煙突が必要だったとも。

空気調整口：空気の入る量を調整することで炭の燃焼度合いを微妙に調整することが出来る。

空気穴：この穴も燃焼を促進させるための穴であるが、ここから細かな炭の粉がこぼれ落ち、布を焦がすことが多々あったという。

受け台：今の電気アイロンのように立て掛けることができないので、受け台が必要であった。この受け台も熱を帯びるので、通常はこの下に木の板を取り付けて使うことが多い。

W96　H175　D180

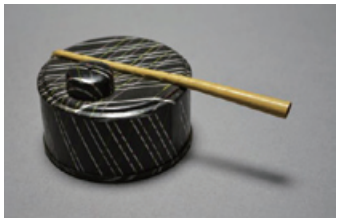


W107　H196　D224

W99　H150　D179
重さ 3 kg

皺（しわ）を伸ばすことを目的としたアイロン掛けに必要なものは、水分と熱と圧力。絡まった繊維に水分を与えて柔らかくし、圧力を加えて強制的にまっすぐに伸ばし、この状態のものに熱を加えて繊維の水分を取り除き伸ばした状態を維持させるという訳です。受け台の上で、アイロンが十分に熱くなったかを確かめ、手拭などで当て布をしてアイロン掛けを行いました。

Wφ69　H71　D148



Wφ66　H46　D110

霧吹き：皺を伸ばしたい布に霧吹きをかけて、湿らします。左はトタン製、右はセルロイド製。

●炭をあつかうための道具

火鉢：冬の間だけでなく常に火鉢には熾（おこ）した炭がありました。火鉢の中には火箸、五徳、灰ならしがあります。

Wφ440　H292

Wφ202　H137　D394

W160　H95　D376

台十能：熾きを取り運ぶための道具です。

火起し：中に炭をいれ火にかけると炭に火が移り炭が熾（お）きます。

Wφ144　H115　D295

W318　H250　Dφ284

Wφ212　H166

火消壷：熾（お）き火を消したり、炭火を途中で消し、消し炭をつくるのに使います。

（東海民具学会　岡本大三郎）

仏像のススメ

～新指定の仏像から～

平成27年７月24日、新たに７件７躯（く）の仏像が市の有形文化財（彫刻）として指定されました。また、１件２躯の仏像が既に指定されている文化財（木造千手観音菩薩立像／猿投神社）の附（つけたり）として追加指定されました。仏像の指定は平成15年の法興寺（加茂川町）の阿弥陀如来立像以来、12年振りのことです。

今回まとまって指定された背景には、平成26年３月に刊行された『新修豊田市史21　別編　美術・工芸』編さんのために行われた調査により詳細が判明したことがあります。平成18～24年度までの６年間で、延べ150日に渡る調査を行った結果、数多くの平安仏や鎌倉仏などが見出されました。

今回指定された仏像は、市内に現存する仏像の中でも古いもの（平安時代から安土桃山時代）で、市域の歴史にとって重要であり、保存すべき価値を有しているため、今回の指定となりました。

指定された仏像は、阿弥陀如来が４躯、薬師如来が１躯、不動明王が１躯、毘沙門天が３躯です。そもそも仏像は、大きく分けると「如来」「菩薩」「明王」「天部」の４つに分類することができます。それぞれを簡単に説明すると、「如来」は“悟りを開いた人”の意味で仏像の最上位にあり、「菩薩」は如来の衆生（しゅじょう）（一切の人類や動物）救済の補佐役で、「明王」は仏敵を追い払い衆生を帰依（きえ）させ、「天部」は仏とその教えを守る護法神です。今回の仏像でいうと、阿弥陀如来と薬師如来が「如来」で、不動明王が「明王」、毘沙門天が「天部」になります。

ここでは、“阿弥陀如来”“薬師如来”“不動明王” “毘沙門天”について少しだけ詳しくお話します。

阿弥陀如来は、無量の寿命（永遠の生命）と無限の光明で現世に生きる人々を救い、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えることで臨終の時に極楽浄土へと導く仏です。装飾品は身につけず、衲衣（のうえ）１枚をまとい、やさしい顔をしています。

薬師如来は、すべての人の病気を癒（いや）すほか、国の災禍をも治めるなど、現世利益をもたらす仏です。装飾品は身につけず、衲衣を１枚まとい、左の掌に薬壺を持っています（平安時代以降）。

不動明王は、如来の教えに従わない者たちの前に忿怒（ふんぬ）の姿で現れ、煩悩を焼き清めて教化する仏です。煩悩を焼き尽す火焔光背、右手に智慧（ちえ）を象徴する宝剣、左手に悩めるすべての衆生を残さず救う慈悲を表す羂索（けんさく）を持ち、忿怒の顔をしています。

毘沙門天は、四方を守護する四天王の１神である多聞天の別称で、古くから北方守護、武勇神、財宝神として信仰されてきた仏です。怒りを表す忿怒の顔をしており、甲（鎧）を身に着け、三叉戟（さんさげき）、鉾などの武器を持った武人の姿をしています。

仏像は非常に種類が多く、とっつきにくい感じがしますが、一つ一つの意味を知ることで、その奥深さを感じることができ、また親しみも感じることができると思います。　（伊藤圭一）

①木造阿弥陀如来立像／新規／性源寺：広川町
（もくぞうあみだにょらいりゅうぞう）
②木造薬師如来坐像／新規／華蔵院：桂野町
（もくぞうやくしにょらいざぞう）
③鋳造阿弥陀如来坐像／新規／向陽寺：折平町
（ちゅうぞうあみだにょらいざぞう）
④木造阿弥陀如来坐像／新規／西運寺：市場町
（もくぞうあみだにょらいざぞう）
⑤木造阿弥陀如来坐像／新規／阿弥陀堂：西丹波町
（もくぞうあみだにょらいざぞう）
⑥木造毘沙門天立像／新規／中宮寺：桑田和町
（もくぞうびしゃもんてんりゅうぞう）
⑦木造毘沙門天立像／新規／香積寺：足助町
（もくぞうびしゃもんてんりゅうぞう）
⑧木造毘沙門天立像／追加／猿投神社：猿投町
（もくぞうびしゃもんてんりゅうぞう）
⑨木造不動明王立像／追加／猿投神社：猿投町
（もくぞうふどうみょうおうりゅうぞう）

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

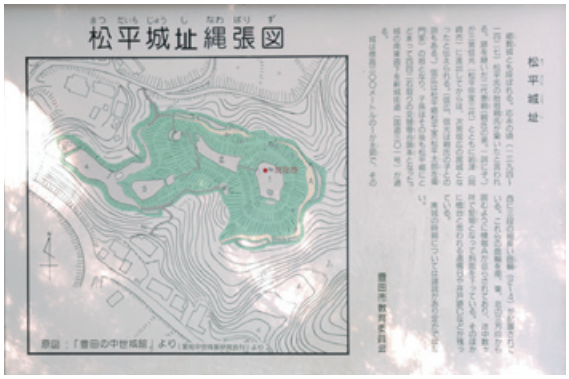
⑧

⑨

特別展「家康の遺宝展」関連企画

豊田市に残る　松平家の山城

徳川家康の先祖・松平家は、豊田市の松平郷から出て、西三河へ、尾張へ、そして全国へ支配を拡げていきました。その過程には多くの合戦があり、その合戦の拠点となるのが山城です。豊田市には多くの山城があり、現在でも400年以上前の痕跡を見ることができます。



縄張図（松平城案内板）

【山城探訪のすすめ】

1．訪れる際は、足元や蜂・蛇・イノシシ・クマなどに注意！
2．縄張図を参考にすると城の遺構がわかりやすい。
3．地形をよく見て遺構をみつける。
　Ex）・平らになっている→曲輪・郭（建物が作られるところ）
　　・窪んでいる→堀
　　・盛り上がっている→土塁

などなど

国指定史跡　松平氏遺跡

松平城（郷敷城）〈松平町三斗蒔〉

松平家初代親氏が築いたとされ、松平郷に居住した松平太郎左衛門家に受け継がれました。太郎左衛門家は普段は松平東照宮の場所にあった屋敷に住み、戦になるとこの城に立て籠ったといわれています。

各曲輪に土塁がないのは古い造りで、室町時代の典型的な山城といえます。この城を守るには、最低数十人が必要と思われ、親氏がそれだけの下人を有する存在であったと想像できます。

曲輪（平らになっている。曲輪をつなげて城を構成する。）

主郭にある碑

市指定史跡

松平城山城（大田城）〈大内町城山〉

松平家の分家である大給松平家の支城で、本拠の大給城とともに防衛ラインを形成しています。

遠景

石垣（近世の石垣に比べ、あまり加工していない石を積んでいる。）

（山田佳美）

夢あふれた枝下吊り橋跡

【写真１】

猿投グリンロード枝下IC付近の県道11号線から矢作川をふと望むと、巨大なコンクリート製の構造物が目に入ります【写真1】。何の構造物だったのか。川の畔にあるのだから橋の一部と推察するが、車が通るには小さい。そう、これは人々が両岸を渡る吊り橋でした。しかし、その歴史は余りにも短いものでした。

当地域において矢作川を渡る手段は、享保３年（1718）から運航されていた渡し船でした【写真2】。三河湾で造られた塩や海産物を信州へ運ぶ大事なルートである飯田街道（塩の道）の中で、大河矢作川は最大の難所で、この渡し船が矢作川を渡る唯一の手段でした。時代とともに矢作川を渡るルートは変化していきましたが、ここが初代のルートと言えます。しかし、大雨のときはたびたび川が増水し、船の管理の大変さや運航が止まるなどの不便さから、昭和27年（1952）を最後に、渡し船は234年の歴史に幕を閉じました。

それ以降、東枝下と西枝下の人々が行き交う手段は、上流1.7Kmにある広梅橋となり、対岸の場所に行くには、その倍の3.4Kmも歩かなければいけなくなりました。

東枝下に農地を持っている西枝下の人々の苦労、また、通学通勤に西枝下にある名鉄枝下駅まで行かねばならない東枝下の人々の苦労不便は、相当なものでした。そこで東西、両枝下住民が負担金を出し、豊田市と合併前の猿投町の事業として、吊り橋を建設することとなりました。昭和33年（1958）に着工し、翌年の昭和34年4月に待望の吊り橋が完成しました。総延長98m、幅員2m、高さ4.5mの堂々としたもので、これにより東西両枝下住民はいつでも気軽に行き来が出来る様になり、農地耕作、通勤通学面が各段に便利になりました。また、加茂県立公園（越戸ダム上流地域は戦前からの景勝地で、昭和26年に公園として指定された）の観光施設として大きな期待も生まれ、秋の行楽シーズンには大勢の人々が風景を楽しむと予想され、まさに夢の吊り橋でした。

しかし、喜びも束の間、同年行楽シーズン前の9月26日東海地方を襲った伊勢湾台風は各地に未曽有の被害をもたらし、この吊り橋も残念ながら流出してしまいました。長く待ちわび、期待が大きかっただけに、住民たちの失望とやりきれない思いを察すると、今でも言葉が見つかりません。その後、この吊り橋は復旧される事はありませんでした。

車社会を見越して、車が通行できる橋が計画され、吊り橋跡の上流300mに橋が完成したのは昭和42年3月でした。橋名は東西両枝下の名から「両枝橋」【写真2】と名付けられました。かつての東枝下は石野町に、西枝下は枝下町に名前は変わっても、両枝下の絆と思い出が橋名に込められています。そして、現在吊り橋跡には支柱が1つ残されており、過去の台風被害の大きさを後世に伝えています。それと同時に、僅かな間でしたが人々の暮らしに役立った事や、観光客に笑顔をもたらした事に誇りを持って、吊り橋跡の支柱は今も堂々とそびえています。

（とよた歴史マイスター　田内三男）

【写真２】（西枝下は現在の枝下町、東枝下は現在の石野町）

新収蔵資料紹介 -3

大夜着（おおよぎ）

この大きくて、綿が入った分厚い着物は、どのように着るのでしょうか。試しに羽織ってみましたが、重くて歩くことはできません。

大夜着は、江戸時代から掛け布団として使われていたものです。昔は、普通の着物を掛け布団としていましたが、次第に布団専用のものが作られるようになりました。裕福な家では、嫁入り道具のひとつとして新しく仕立てた夫婦一対のものを、箪笥や長持に入れて持って行きました。しかし、客用として使うことが多かったようです。四角い布団は江戸時代末に関西で使われ始めたといいます。

写真の大夜着は中馬街道で栄えた九久平町の老舗商店さんから寄贈していただきました。背中には大きく家紋が入っており、２点揃っています。

掛け布団としては重すぎることはありません。首まで掛けると襟の部分がフィットして冷気が入るのを防ぎます。

着るものではありません

とよた歴史マイスター活動紹介

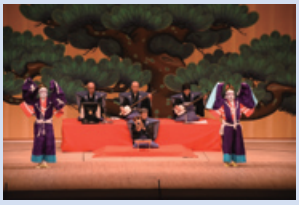
豊田市の歴史・文化財について学び、伝えていく「とよた歴史マイスター」。11月に新メンバーが加わり、現在59名で活動しています。写真はマイスターの活動の中で作成した豊田市の歴史・文化財を紹介するパネルです。この活動には5名のマイスターが参加しました。「第26回全国地芝居サミットinとよた」でロビーに展示し、県外からの来場者へ豊田市の魅力を発信しました。他にも、郷土資料館での展示案内、子どもの体験講座手伝いなど、様々な活動をしています。

とよた歴史マイスター募集中！

○申込方法　専用申込書をご提出ください。
　※交流館などで配布。郷土資料館HPにも掲載中。
○平成28年度募集締切
　前期　5月31日　後期　10月31日
○平成28年度講座受講日
　前期　6月11日　後期　11月12日
　※活動開始は、講座受講・認定後です。

報告　第26回全国地芝居サミットinとよた

11月28日（土）市民文化会館、29日（日）磯崎神社（深見町）で全国地芝居サミットを開催しました。1日目は650人、2日目は700人の来場者を迎え、農村歌舞伎の未来を担う子どもたちも練習の成果を披露しました。



1日目

2日目

■利用案内■

開館時間　9：00～17：00
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
　　名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
　　愛知環状鉄道「新豊田駅」より　徒歩 15 分
　　とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩 5 分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.94
平成 28 年 1 月 27 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471- 0079 豊田市陣中町 1 ー21
TEL.0565-32-6561　FAX.0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com
※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。